

平成15年度企画展
こぼれ話 I

流転の絵馬に明治を見る 地域の記憶を留める文化財



素盞雄神社旧蔵絵馬（陸上自衛隊松戸駐屯地所蔵）

右上に「明治十五年十月」とある。絵の全体に金粉が霞のようにかけられている。大勢の職人が作業する姿が描かれており、当時の風俗等がわかる資料として貴重なものである。

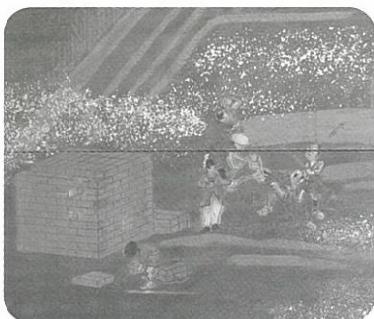
荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(15)0035-2号

現在、陸上自衛隊松戸駐屯地広報展示室に展示されている素盞雄神社旧蔵絵馬は、地域とラシャ場（南千住製糸所）の関係を示す貴重な文化財です。では、この絵馬はどんな由来を持つているのでしょうか。

絵馬は、明治10年（一八七七）10月に素盞雄神社（南千住六丁目）に奉納されました。絵の作者は「向栄」。この画家について、どういった人物なのか現在のところ分かっていません。絵馬は横約2m、縦約1.5mと大きく、ラシャ場の建設風景が詳細に描かれています。左の上部には富士山、竹矢来に囲まれた建設現場には、まげを結い半纏を着たたくさんの職人たちを指図する御雇外国人の姿もあります。また、画面両下部には、奉納者の名前が墨で書かれています。大工や石工、それに地元で材木屋を営み、ラシャ場の仮事務所として自分の家屋を提供した「吉田万右衛門」の名前がありました。ラシャ場建設に関係した人びとが、工事が無事に成就することを祈願して南千住の鎮守であった素盞雄神社に奉納したと考えられます。詳細に描かれた絵馬は、当時の風俗を窺える絵画資料としても、地域との関係を考える資料としても貴重な文化財といえます。

奉納後は、素盞雄神社が所蔵していましたが、いつ頃からか神社がラシャ場に寄贈。ラシャ場の参考室に展示されるようになります。太平洋戦争が始まると軍需工場であったラシャ場は空襲の標的になります。昭和19年、当時のラシャ場の廠長向井金次郎少将は、絵馬を東北毛織株式会社盛岡工場に疎開させました。



素盞雄神社旧蔵絵馬（部分）陸上自衛隊所蔵
帽子をかぶった御雇外国人が、まげを結った職人達を指揮している。左にあるのはレンガ。

参考文献 三木克彦『井上省三とその妻子』ルードルフ・ケーニッヒの手記から』（私家版）、井上省三記念事業委員会編『井上省三伝』（井上省三記念事業委員会）

（加藤陽子）

しかし、戦後の混乱期、絵馬の所在は時忘れ去れてしまいました。ところが、ラシャ場に勤務していた川村栄氏が、東北毛織に再就職し、そこで保管されたのを発見したのです。川村氏は元上司である向井氏に絵馬を送り届け、さらに向井氏は自分の前にラシャ場の廠長だった清水菊三氏に絵馬を渡したそうです。しかし、向井・清水両氏が亡くなつたたまち。荒川から引いた堀には、薦口を使つて荷揚げをする人びとの姿。お昼の休憩なのか弁当を頬張る職人たち。職人たちを指図する御雇外国人の姿もあります。また、画面両下部には、奉納者の名前が墨で書かれています。大工や石工、それに地元で材木屋を営み、ラシャ場の仮事務所として自分の家屋を提供した「吉田万右衛門」の名前がありました。ラシャ場建設に関係した人びとが、工事が無事に成就することを祈願して南千住の鎮守であった素盞雄神社に奉納したと考えられます。詳細に描かれた絵馬は、今私たちが残す努力をしなければならない、そんな教訓を絵馬は物語っています。その絵馬は、今も、陸上自衛隊松戸駐屯地で静かに来場者を迎えています。

しかし、戦後の混乱期、絵馬の所在は時忘れ去れてしまいました。ところが、ラシャ場に勤務していた川村栄氏が、東北毛織に再就職し、そこで保管されていましたのを発見したのです。川村氏は元上司である向井氏に絵馬を送り届け、さらに向井氏は自分の前にラシャ場の廠長だった清水菊三氏に絵馬を渡したそうです。しかし、向井・清水両氏が亡くなつたたまち。荒川から引いた堀には、薦口を使つて荷揚げをする人びとの姿。お昼の休憩なのか弁当を頬張る職人たち。職人たちを指図する御雇外国人の姿もあります。また、画面両下部には、奉納者の名前が墨で書かれています。大工や石工、それに地元で材木屋を営み、ラシャ場の仮事務所として自分の家屋を提供した「吉田万右衛門」の名前がありました。ラシャ場建設に関係した人びとが、工事が無事に成就することを祈願して南千住の鎮守であった素盞雄神社に奉納したと考えられます。詳細に描かれた絵馬は、今私たちが残す努力をしなければならない、そんな教訓を絵馬は物語っています。その絵馬は、今も、陸上自衛隊松戸駐屯地で静かに来場者を迎えています。

名所江戸百景 「綾瀬川鐘か渕」の見方



広重は「綾瀬川鐘か渕」をどこから見たか?

ある日のこと、荒川ふるさと文化館に問合せの電話があった。名所江戸百景「綾瀬川鐘か渕」は、区内の汐入(南千住八丁目)から見た風景ではないかと。

名所江戸百景は、江戸時代の浮世絵師、

歌川広重が江戸の名所を描いた浮世絵シ

リーズである。その内のひとつ「綾瀬川

鐘か渕」は、隅田川と綾瀬川が合流する鐘ヶ淵の風景を描いたものである。

歌川広重が江戸の名所を描いた浮世絵シ

リーズである。その内のひとつ「綾瀬川

鐘か渕」は、隅田川と綾瀬川が合流する

鐘ヶ淵の風景を描いたものである。



名所江戸百景「綾瀬川鐘か渕」(足立区立郷土博物館所蔵)

合歎の花はどこの名所所?

そこで「江戸名所花曆」を見る。これは江戸の四季を彩る花の名所を知る上で便利な本だ。ここに「合歎木 綾瀬川花

又村の川筋、小菅御殿地の跡の辺」とあ

る。現在の足立区花畠町と葛飾区小菅の

辺りということだ。また「綾瀬川合歎木

辺りには片腹痛いことだが)。浮世絵シ

の表題に「綾瀬川」とあるのを筆者はす

かり見落としていたのだ。

名所江戸百景は目の前の光景をそのま

まに描いているとは限らない。広重は写

実的に風景を描写しつつ土地に因むモチ

ーフを象徴的に入れる構図を創出したそ

うである。つまり広重は川の合流地点

(鐘ヶ淵)に綾瀬川の象徴である合歎の

花を添えて「綾瀬川鐘か渕」を表現した

のである。筆者はこの絵に見える風景

を鵜呑みにして、ぬか喜びしてしまった

のだ。

筆者は不勉強を恥じ入りつつ、再開発

の進む汐入に立ち鐘ヶ淵の川面を眺める

のであった。

（弥永浩）

—白鬚橋西詰、再開発地域を眺めつつ—
久々にこのあたりに来たけれど、随分変わったわ。ほんの100年ちょっとの間に、汐入の紡績工場、入会地の草原、貨物駅の線路やドッグも姿を消しちゃって。どこにいるかって。橋場よ。えつ、橋場は台東区ですって。

—困った顔をして—
橋場は、あたしの育ての親の一人。台東区だけの地名じゃないはずよ。ねえ。

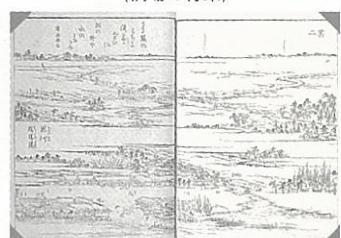
—うなずきながら地方橋場登場—
私、地方橋場です。江戸時代までは

「橋場町地方」、明治の初めの頃は「地方橋場」となりました。もともとは台東区の橋場と合わせて「橋場村」だったのです。あいつが都会に憧れて、江戸の町方に行つてしまつたのが正徳3年。「橋場町」となりました。汐入大根という名産品をかかえていたこともありますが、村の風景や暮らしが好きだった一方の私は土に根ざした地名にこだわり「橋場町地方」を名乗つたのです。一番古い記録は

総泉寺さん—昭和3年に板橋区に移転したとか—に残る天正19年(1591)の徳川家康さんの朱印状で「武藏国豊嶋郡橋場之内二拾石」と記されています。

参考文献 『新編武藏風土記稿』(大日本地誌大系1)、『南千住の民俗』『汐入の民俗』『荒川ふるさと文化館常設展示図録』(区教育委員会)

名所のつぶやき ⑦南千住のアイデンティティ (橋場の行末)



『江戸名所図会』(荒川ふるさと文化館所蔵)

—南千住、したり顔で語る—
橋場って、この大きな白鬚橋があるから付いた地名なのよね。

お前までがそんなことを言うのかい。
皆さんにお話するから、そこでお聞き。

意外でしようが、ここには常に橋がかかれていたわけではありません。隅田川を渡るために、古代以来渡船を利用していました。江戸から明治時代に「橋場の渡し」という渡し場があつたこと、御存知でしょう。白鬚橋がかけられたのは大正3年のこと。最初は私設の木橋で、渡橋料をとつたそうです。

自分がいつ生れたのか、定かなことはわかりません。源頼朝さんが、このあたりに浮橋をかけた頃だとか(『義経記』等)、藤原光俊さんがここにあつた橋の歌を呼んだ頃だとか(『夫木和歌抄』)、全国を旅していた時宗の開祖遍上人がこの辺りの橋を渡つた頃だとか(『一遍上人絵伝』)、いわれています。いずれにしても、私の地名は中世という時代にここに橋がかけられたことから付いたと聞いています。

—ふと寂しそうに—
私の地名が公から消えたのが、荒川区誕生の昭和7年。70年も経つと忘れ去られるものかね。

—目を輝かせて—
そんなことないわ。あなたの血を引く

この南千住が町の歴史としてこの体に刻み伝えていくわ。それに橋場の地名は、少なくともここに集つた人たちの記憶に刻まれたはずよ。

(野尻かおる)



列十遺墳再建碑（史）

記憶は忘としての
れ去られ、悲しいかな墓
は倒れて草に埋もれる始末。そこで墓を再建し、列



東京府仮指定旧蹟標柱(左)と
文化財史跡説明板(右)

一改葬跡墓地上在來ノ石仏像及題目石
其外損害アル處ハ相當ノ修理裝飾ヲ
加ヘ古跡タルノ体裁風致ヲ失フノ遺
憾ナキ様取扱フヘキ事（第二課文
書・地理・補遺）（東京都公文書館藏）
巖考が何とか「古跡タル体裁風致」を維持しようとしたことがわかる。「古跡」という史跡につながるこの表現は、筆者の知る限りもつとも早い。刊行物の中では現れるのは、大正に入つてからである。

回向院からすれば、管理する墓地の範囲を迫られたことになる。そして線路敷地の墓及び遺骨を改葬することになつた。ときの回向院住職・川口巖考は、鐵路を敷設する日本鉄道株式会社(現JR)はもとより東京府との折衝を通じ、日本鉄道株式会社に改葬費用の全額負担を認めさせる。さらには改葬にあたつての条件まで決めた。その条件の中で殊に注目したいのは、次の条文である。

「吉田松陰の墓はどこ?」／「これは誰のお墓?」回向院境内で、とある碑文をノートに写していたところ、度々そう声をかけられた。恐らく、幕末の有名人の墓を見るために立ち寄った人たちだろう。ところが、そのとき写していた碑は、「烈士遺墳再建碑」といつて、そう問い合わせてくる人たちの気持ちを若干裏切るかもしない内容の碑だった。というのも、その有名人の墓が、顕彰のために後年再建された墓であることを物語つているからである。そんな事情からか、碑は境内北側に並ぶ“志士”の墓の裏に、隠し

兼小塚原刑場跡遺跡調査速報
そして回向院は
史跡になつた

専門員は見た！

士の偉績を想起させ、皇国人心を一致させよう、というのが趣旨らしい。

選定は区民にとつてず
れてきたことを示してい

士の偉績を喚起させ、皇国人心を一致させよう、というのが趣旨らしい。そんな目で有名人たちの墓を見ていくと、なるほどほんとに、昭和8～17年にかけて同会が建てた、と書いてある。実のところ今日の回向院で目にしているのはほとんどこれらの方の墓であって、その時、烈士遺墳再建会の当初の目的は、すっかり忘れ去られている。忘れ去られることを経て、それらの墓は、回向院が史跡であることを目に見える形で証明しているのだ。回向院にただたたずんでいても当時を想起することはできない。小塚原の首切り地蔵と同じで、この場所の歴史を思い起こさせるという役割を果たしているのである。

選定は区民にとつてず
れてきたことを示してい
た。刑場跡と回向院それぞれに説明板を
建てるべきか否か。刑場の方だけを説明
すると、行き倒れ人などをも弔つた回向
院の性格が損なわれる、さらに現実に建
てる場所の問題として、首切り地蔵の置
かれている場所と回向院では常磐線で全
く分けられており、一つの説明板では不
都合である、と。結果、それぞれに建て
られたのはご承知のとおりだが、要する
に、ともすれば回向院・常磐線・刑場跡
と別々に認識されてしまうのである。者
えてみれば、いずれも元は刑場だつたは
ずなのに……

さらに、開発にともなつて、発せられ
た言葉だということも注目に値する。一
般に、常磐線・隅田川線の開通は、隅田
川駅の開設などいままで、南千住の発展
に寄与した、といわれる。しかし同時に
開発は史跡の破壊につながることを教え
てくれる。このことは、横須賀線が分断
した鎌倉の円覚寺や東海道新幹線が通つ
た清洲城など、しばしば起くる現実であ
る。これは現在でもどちらを優先させる
か頭を悩ませる問題でもある。

そして史跡になつた 嶩考は何より檀家
の墓を預かる身であること、墓地が官有
地（当時）でありその管理者であるとい
う立場を主張し、条件を引き出すことに
成功した（回向院所蔵資料）。

振り返って、史跡としての回向院を語られる、檀家さんではない人びとの目には、幕末有名人の墓しか映っていない。いなにしても、史跡として維持されているに至った歴考の努力をちょっとと思い出してほしい。少なくとも訪れるにあたつては、お墓参りのじやまにならないよう気を付けなければなるまい。〈亀川泰照〉

【参考文献】 「荒川史談」57、「荒川区史」上巻、羽賀祥一「明治維新と宗教」「特集 近代の文化財と歴史意識」(『日本史研究』351)、野尻かおる「行政のなかの博物館」(『歴史評論』62)など
*執筆にあたり回向院に大変お世話をになりました。記して感謝申し上げます。

荒川区指定無形文化財（木目込人）
平成4年度指定 保持者柿沼常吉
光 氏（83歳・西尾久）は去る平成
年11月14日に逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。